

# 近衛家領丹波国宮田荘における悪党について

## ～悪党生西の評価について～

専攻 教科・領域教育専攻  
コース 社会系コース  
学籍 M07176H  
氏名 野村 直道

### 1. 研究目的

本研究の目的は、近衛家領丹波国宮田荘と東寺領大山荘地頭中沢氏との問題、宮田荘における悪党生西の問題について明らかにすることである。

丹波国宮田荘は、現在の兵庫県篠山市の北西部に位置する近衛家領の荘園である。この宮田荘は、隣接する東寺領大山荘地頭中沢氏による武力行使・干渉や悪党事件などの諸問題を抱えた荘園である。

近年発表された櫻井彦氏の研究において、宮田荘の悪党行為について、「宮田荘民の山野用益に関わる権利を回復できない荘園領主近衛家に対する排斥運動であった」と評価された。また、悪党生西と宮田荘官らが「号御家人」した事件については、彼らが荘園領主近衛家が「庇護者であることを否定し、新たな庇護者として六波羅（幕府）を選択しようとしたのであった」と指摘されている。

宮田荘の悪党生西の行動は、櫻井氏の指摘される「宮田荘用水の権利主張」であったのか、幕府から禁じられている「号御家人」する行為も、「新たな庇護者として六波羅（幕府）」を選択する行為であったのか明らかにする。

### 2. 論文構成

はじめに

序章

第1節 宮田荘の概略

第2節 近衛家の支配

1 宮田荘の預所・雑掌

2 宮田荘の下司・公文

第1章 宮田荘木乃部村代官西善主従殺害事件

第1節 相論の経緯

第2節 中沢基員の活動

1 荘堺での武力干渉

2 中沢基員の活動

第3節 中沢直基による「大袋大犯」事件

第4節 中沢基員・直基父子と六波羅奉行入

第2章

第1節 悪党事件の経緯

第2節 生西の悪党行為と評価

1 悪党行為の地理的要因

2 悪党行為の性格

むすび

### 3. 概要

まず序論では、宮田荘の概略と荘園領主近衛家による支配体制を取り上げた。宮田荘は現在の兵庫県篠山市の北西部に位置し、旧多紀郡西紀町一帯が宮田荘の荘域であったと推測される。宮田荘の成立は、関白近衛政家の日記『後法興院記』の応仁2年（1468）4月10日条によると藤原良房以来、貞観年間（859～876）に成立したと認識されるほど古い荘園である。また、重要な荘園として認識されていたためか、近衛家の内舎人である進藤氏を代々預所として補任していた。現地の荘官である公文には、承久の乱

直後、一時的に幕府が任じた関東御家人石川六郎が就いたが、すぐに近衛家により停止され、現地の有力者が公文・下司に補任されたようである。

第1章では、大山荘地頭中沢氏と宮田荘との相論および、中沢氏の活動を取り上げた。中沢基員による宮田荘木乃部村代官西善主従殺害事件では、地頭中沢基員による、木乃部村代官西善主従殺害という非常に暴力的な行為と、宮田荘との相論における中沢基員と六波羅奉行人たちとの関係をみる事ができた。宮田荘との相論の中で、中沢基員は六波羅奉行人と結託して、証拠の隠蔽、虚偽の主張など、相論において非常に狡猾に立ち回ったことが浮かび上がる。また、中沢基員の子息直基によって引き起こされた宮田荘木乃部村住人加治大夫安貞に対する拉致監禁事件、「大袋大犯」事件では、中沢氏と六波羅奉行人らとの非常に密接な関係と、六波羅奉行人らと結託した狡猾とも言える訴訟技術を明らかにできた。

第2章では、宮田荘に打ち込んだ悪党生西の行動を取り上げた。本論では、悪党生西が宮田荘に打ち込んだ要因として宮田荘の地理的な要因を述べた。宮田荘は、古山陰道が東西に走り、大山荘との境界付近には大山市庭があったとされる交通の要衝であり、また、官衙的な遺跡の出土から、この地域の経済の中心地であったと推測した。以上の理由から生西が打ち入り、直接的に富を収奪するべく悪党行為を行ったものであると結論付けた。さらには、生西らの悪党行為は、郡使が提出した地域住民による請文の存在から決して歓迎されたものではなく、櫻井氏が主張される「宮田荘用水の権利主張」という行動ではなかった。「号御家人」という行為も鎌倉幕府法により禁じられ、「新たな庇護者として六波羅（幕府）を選択しようとしたのであった」わけでもない結論付けた。

悪党生西による打ち入りの被害状況から、当荘の下司・公文は、多くの下人らを持ち、それ

ぞれが家を持っていたことが明らかとなった。また、名田を所有し、地域の有力者であり、公文・下司として荘園経営行い、富を蓄えていたことが明らかである。このような理由から、「前公文」悪党生西による悪党行為は、代々受け継がれてきた公文という職を、罷免されたことに対する、現役荘官たちへの報復行為であると考えられる。

最後になるが、生西および彼に加担した悪党らの居住地と推測される荘園には、地頭が設置されていないことに気づいた。生西等が三〇〇人あまりの与党を引き連れ活動できたのは、そのようなところに原因があるのではないかとも思う。このことについては、今後の研究課題としていきたい。

主任指導教員 河村 昭一  
指導教員 河村 昭一